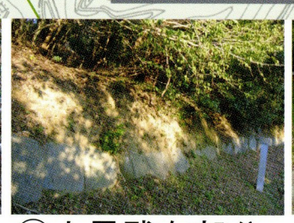
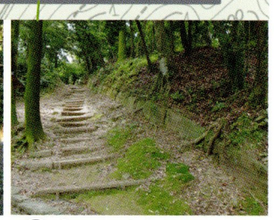
①複数段積み　②南谷水門　③馬蹄石　④北側斜面

⑤列石角部分　⑥岩盤加工部分　⑦土塁残存部分　⑧杉ノ城堀切

福岡ドーム約5個分に相当します。最高所は高良大社が鎮座する本宮山（標高251m）、最低所は北谷水門推定地（標高65m）で、その標高差は180mもあります。

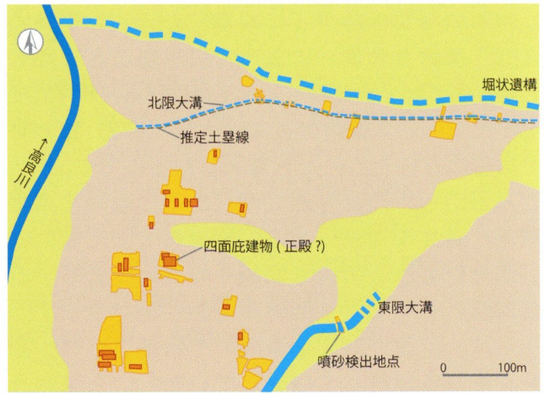
列石は、緑泥片岩という付近で産出する石材を、ノミなどを使い表面を平らにして方形に切石加工したものです。大きさは、小さいもので長さ20cm程、大きいもので3.2mもありますが、平均的な一辺の長さは70～80cmくらいです。これを基本的には一段で直列に並べています。その上部には、版築工法による土塁を築いていたものと思われますが、現在はほとんど残っていません。

2カ所の谷部には水門が築かれたものと思われます。大きく壊れながらも、南谷のもののみが残存しています。谷を塞ぐように切石を積み上げたもので、その推定規模は長さ約7～9m、高さ約3m、基底部幅約9mであったものと思われます。この上部に土塁や柵などがあったのか、排水溝の構造はどうであったのか、城門が付設されていたのかなど、具体像は謎のままです。

4．「藤山道」と前身官衙（先行官衙）・上津土塁跡

では、高良山神籠石はいったい何を守ろうとしたのでしょうか。高良山の北西麓、筑後川左岸の枝光台地上には、筑後国府跡前身官衙（先行官衙）と呼ばれる、大形の建物が整然と建並ぶ施設が発見されています。筑後川は有明海に通じる水上交通の動脈で、極めて利便で重要な位置にあたります。また、施設が立地する台地を取り囲むように、堀状遺構や大溝などが掘削されています。大溝下層からは、7世紀中頃～同末にかけての硯や墨書土器、漆が付着した土器などが大量に出土しています。このことから、付近一帯には7世紀中頃以降、行政機構や工房が存在し、かつ、それらは濠や大溝などによって防御された軍事色の強い施設であったことが想像できます。

筑後国府跡第210次調査で発見された大形の四面庇建物。前身官衙の正殿建物と考えられている。



前身官衙の主要遺構分布。台地上に大形の建物群が整然と建並んでいる。台地周辺は濠や大溝、河川で囲い防御性を高めている。

一方、前身官衙の南方約3.5kmの地点には、上津土塁跡があります。西に延びる二つの丘陵を塞ぐように、長さ約450m、幅約20mもある土塁が構築されていたことが判明しています。土塁は、基礎部に「敷粗朶工法」を施し、その上部に「版築工法」を用いて、築堤されたものと思われます。また、土塁の南側には幅約18mの堀状遺構が存在します。工法・構造ともに太宰府市の水城とよく似ています。この土塁は、律令官道西海道以前の古道「藤山道」（松村一良氏による）を遮断するように造られています。「藤山道」は三毛郡（現大牟田市）付近から高良山神籠石・前身官衙西側を通り抜け、肥前・筑前方面へと向かう重要な交通路です。堀状遺構の位置から、この土塁が南の有明海方面からの侵入を防ぐために設置されたと考えることができます。出土土器から、土塁は7～8世紀ころのものと考えられます。

5．神籠石の崩壊と七世紀のくるめ

高良山神籠石・前身官衙（先行官衙）・上津土塁跡の３遺跡にみられる共通項として、大地震の痕跡が挙げられます。前身官衙では東限大溝の噴砂、上津土塁跡では噴砂・地滑りなどが検出されています。また、高良山神籠石でも、高良大社の裏は急な崖となっており、列石線が